皆さんが暮らす奈良県で編纂された、古事記の世界をのぞいてみませんか？

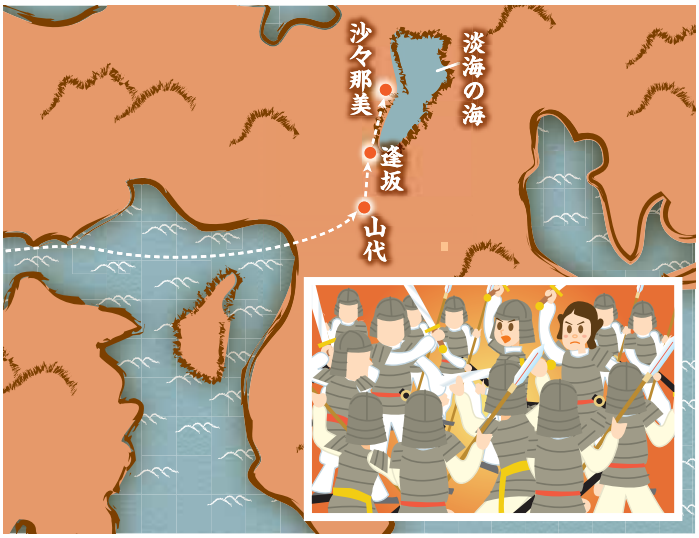
はじめての古事記

第10話

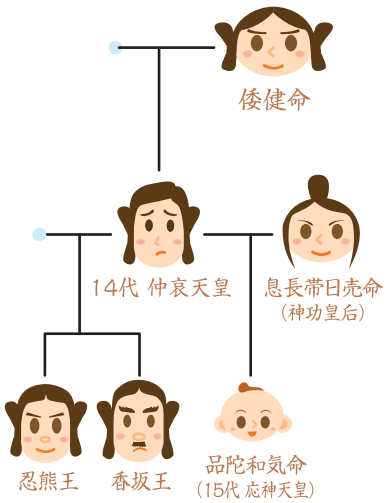
古事記朗唱大会があります。
詳しくは18ページへ！！

忍熊王の反乱

おしくまのみこ



〈今回の登場人物〉



仲哀天皇記には、仲哀天皇の活躍はほとんど記されていません。早々に崩御した天皇の代わりに話の中心となるのは、皇后の息長帯日売命（神功皇后）です。

皇后は、神のお告げを聞き、神々の力を借りつつ、朝鮮半島の新羅に遠征し、天皇に奉仕するという約束を新羅国王から取り付け、筑紫に戻ってきます。その時に、品陀和気命（後の応神天皇）が生まれました。品陀和気命は、お腹にいる時から、天皇になるとのお告げを受けていました。しかし、そのことが大きな火種となりました。

神のお告げとはいえ、神功皇后のもとで勝手に決められたわけですから、腹違いの皇子の香坂王と忍熊王は黙っていません。

香坂王は戦う前に亡くなりましたが忍熊王は、ヤマトに帰還する皇后が、船から上陸する時をねらって軍を興しました。ところが、本船を空船にした皇后の作戦にまんまと引っかかり、むざむざ皇后軍本体の上陸をゆるしてしまいます。

後退しながらも善戦する忍熊王軍は、途中山代でだまし討ちにあっても立て直し、逢坂（京都滋賀府県境）まで後退しつつもくらいつき、最後は沙々那美（琵琶湖西岸か）まで戦いは及びました。

しかし、沙々那美において敗れたことで、忍熊王と将軍伊佐比宿禰は、相手の将軍に斬られる前に、淡海の海（琵琶湖）に身を投げ、戦いの幕を閉じます。

戦力の差はわかりませんが、抗する戦況から、忍熊王側につく人たちが多かったことが窺い知れます。

（本文 万葉文化館　竹本　晃）

編集部の古事記コラム

古事記ではあまり登場しない仲哀天皇ですが、島根県に伝わる石見神楽の演目の一つ"塵輪"の中では少し違うエピソードが伝わっています。

それによると、仲哀天皇の時代、新羅の国より数万人の軍勢が攻めてきて、その中で特に塵輪という、身に翼があって黒雲に乗った鬼神のようなものが、大暴れして人々に危害を加えたとのこと。これに対して仲哀天皇は自ら弓矢を取って塵輪を射落とし、新羅軍を退けたと語られています。

この他にもさまざまな演目がある石見神楽。古事記と比較しながら見てみるのもおもしろいかもしれませんね。

クイズ 古事記ハカセへの道

先月の答え

②仲哀天皇の皇后、神功皇后のことでした。

今月の問題

Q 応神天皇の子、仁徳天皇は治世が慈悲深かったそうですが、皇后を悩ませたのは何でしょうか？

①男の料理に凝りすぎる。
②おしゃれにこだわりすぎる。
③多くの女性にもてすぎる。

答えは来月号を見てね♪

問 県広報広聴課　☎0742-27-8326　FAX 0742-22-6904